

リンゴ



(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法
収穫直後 [10月下旬 ～11月上旬]	樹勢の回復 養分貯蔵促進	<ul style="list-style-type: none"> ●根っ酵素500倍液を葉面散布 特に疲れている場合は3～5ℓを灌水。(300倍程度) ※根の働きを強くすると、根は落葉直後まで動き、葉の光合成は落葉前まで活発に継続して、デンプンを枝幹・根に蓄え、翌春の生長の源となる。9月下旬～1月中旬に休眠している芽は、デンプン蓄積が多いと、寒さにあうにつれて(ハードニング)、耐寒性が高まる。特に耐寒性を強めるには 花咲くCa液 葉面散布。
元肥 落葉後～ 春、動き始める前 [11月～3月] ※なるべく早め、11月の施用が効果大きい。積雪などで、春に施用するなら3月に遅れないように	1年分の基本となる地力作り(一年分の栄養を、ほぼ補給) ※右記4種を同時に投入し、なるべく土と混ぜる ※施肥位置は樹の近くだけでなく、根の届く範囲、全体にムラなく	<ul style="list-style-type: none"> ●ラクトバチルス600g ●米ヌカ200kg ※堆肥 1トン(以上)の投入を推奨。 ●硫安60～80kg ※特に痩せ地で有機物不足の場合は、硫酸カリ20kg追加。 ※複合有機肥料を使う場合 チッソ成分12～16kgとする。 ●畑の大将<青> 60～80kg ※施用量は原則として 硫安(チッソ)の量と同じ以上に。 ※土壌pH:5.5～6.5の範囲、なるべく6.0を目標に。酸性にはかなり強いものの、春～秋にpH:5.5以下だと枝先が弱く、展葉・開花が揃わず、落果が多くなる。
春先の根の強化 [3月] ※3月に樹液が流動しはじめ、根が動き始めるこの時に…	春の芽、葉、花を強く動かす	<ul style="list-style-type: none"> ●マンゾク粒状30kg ※または根が動き始める頃に根っ酵素3ℓ 灌水。 ※根と導管の動きを強くし、(4月)発芽・展葉を促進しやすい。(5月)開花が一斉にそろい、目立って結果が良くなる。 ※もし秋冬の元肥が不足(EC:0.1)の場合は硫安20kgを。 ※もし秋冬のカルシウムが不足(pH:5.8以下)の場合や、チッソ過多(EC:0.5以上)の場合、樹勢が強すぎる場合は、展葉中迄に畑の大将<青> 20～40kgを施す。 カルシウムは 花の受粉・着果・細胞分裂・初期の果実形成・生理的落果(ジュンドロップ)の防止に極めて重要。
肥大中の コントロール [6～8月]	[6月] 果実肥大	●根っ酵素500倍液を葉面散布 →根の強化、樹勢維持、新梢の充実。
	[7月] 花芽分化	●花咲くCa液500倍を葉面散布 →樹を落ち着かせる。
	[8月] 花器形成	●花咲くCa液500倍を葉面散布(7日間隔で繰返し・適宜、灌水)
	[8月下旬] 新根	●根っ酵素500倍液を葉面散布
秋肥 [9月]	果実肥大と、樹勢の維持	<ul style="list-style-type: none"> ●硫安20kg ●畑の大将<青> または 田畑の大将<赤> 20kg ※土壌EC:0.2以下(硫安施用後0.4迄)、葉中チッソ3.7%前後の範囲内で、状態によりチッソとカルシウム量を調節する。 ※カルシウムが不足すると 貯蔵中の果実にビターピット(苦痘病)、ゴム病、樹皮に粗皮病(Mn過剰)が発生しやすい。 ※根が弱い場合はマンゾク粒状 20kg追加。
収穫20日前[10月]	果実の仕上げ	●花咲くCa液500倍を葉面散布 →成熟促進、増糖・着色。

※液剤の葉面散布は状態により2回(以上)繰り返し。特に強く効かせる時は灌水施用。

※モンパ病の対策…軽い場合は 随時、マンゾク・粒状60kgを散布する。

ひどい場合はまず根を掘って根っ酵素(1本当り)1ℓを100倍に薄めて灌注し、根を洗す。

3～4日後、ラクトバチルス30gを米ヌカ7kgに混ぜて、散布し、覆土する。その後、7日ごとに2回、根っ酵素300倍の灌注をする。